

# なかすか 中須賀元町界隈の歴史探訪

小嶋 智 憲

昔の中須賀は、春木川より亀川方向別府大学付近、大石より下方海岸まであり、昭和三八年に桜ヶ丘が分町、昭和五〇年四月一日に中須賀元町・本町・東町に分町しました。今回紹介する内容は、中須賀の歴史と文化をまとめた『中須賀元町四〇周年記念誌』(平成二六年十一月発刊)の抜粋です。石碑に刻まれた文字は、時とともに風化し人間の記憶も薄らいでしまいます。後世の人々が、古里を思う時この地に居た証拠として、心の支えになればと思い記念誌を編纂しました。

## 1 中須賀元町に関する歴史探究

北石垣・中須賀(元町)の歴史は、別府市誌等の文献を参考に編集し纏めたものであり、不明な部分は先輩等の意見を拝聴し、さらに不明な箇所については、推測的記述になったことを予めご了解賜りたい。

石垣地域の地理・地形の特徴は、鶴見山の火砕流等による

火山噴出物と硫黄山・鍋山・大平山(扇山)等を源流とする平田川、春木川・境川からの岩石・土砂等流下物が別府湾に向かつて堆積し、広大な扇状地を形成した石垣原地域の北側に位置する。

(1) 石垣地域は、宇佐宮(宇佐八幡)領の石垣荘であり(弘安八年(一二八五)大友頼泰が鎌倉幕府に注進した豊後国図田帳に記述)正保四年(一六四七)の正保郷帳に北石垣村・石垣村の地名が記されている。また、元禄七年(一六九四)の貝原益軒作成「豊國紀行」によると、慶長五年(一六〇〇)九月にあった「石垣原古戦場見取り図」に北石垣・中石垣・南石垣の地名が記されており、遙か昔の石垣荘時代の頃から使われている地名である。

北石垣村は、石垣原扇状地の北部、海岸寄りの村である。東は別府湾・西は鉄輪村・南は中石垣村・北は平田村に接する。村の南方を春木川が東流して別府湾に入る。

この地域の歴史を振り返ると、宇佐宮荘園時代、大友領時代を経て江戸時代には徳川家康の二男(結城秀康)の長男、つまり孫の松平忠直という越前六七万石の殿様がいた。幕府の処遇に不満がつのり、乱行のため遂に元和九年

(一六二三) 豊後萩原(今の大分市東部)に配流され、賄い料五千石で蟄居となった。号は一伯という。一五年後の寛永一五年(一六三八)都合により近くの高松村などを賄料地から外し代わりに鉄輪村と北石垣村を入れたら、少し増額となった。慶安三年(一六五〇)彼の死去と共に指定が解かれ一般の幕府領に戻った。

中石垣村は、石垣原扇状地の中央、海岸寄りの村で、東は別府湾・西は鶴見村・南は南石垣村・北は春木川を挟んだ北石垣村に接する。この地域の歴史を振り返ると、大友義統除封の文禄二年(一五九三)直ちに行われた太閤検地の結果、石垣地区は南村一二九〇石余、北村九三五石余とあり、蔵入地と呼ばれ、後の幕府領である。

ところが、寛永四年(一六二七)細川忠興は、弟の娘の嫁ぎ先、筑紫氏が関ヶ原戦で西軍方だったため浪人中のところを、彼の口利きで旗本三千石に取り立ててもらった。領地として、別府・浜脇・小野小平と南石垣の三分の二ほどを与えられることになった。こうして、筑紫領となった三分の二部分を南石垣村とし、残りの北側約三分の一を中石垣村と呼ぶことにした。

中石垣村は、昔のまま幕府領として残ったが、慶安年間

(一六五〇年ごろ)筑紫領は幕府に返上となり、以後両村とも幕府領となったが、「中石垣村」という呼び方は残った。やがて、一八〇〇年頃から幕府領の世話を島原藩が預かって行く都合で、中石垣村以北、豊岡小浦村にかけては横灘北組一か村、南石垣村以南は横灘南組六か村と区分けし、組ごとの連帯が強められた。〔明治八年(一八七五)南石垣村と合併した。〕

南石垣村は、石垣原扇状地の中央、海岸寄りの村で、東は別府湾・西は鶴見村・南は境川を隔てて別府村・北は中石垣村に接した。この地域も、幕府領である。

(2) 明治以降の歴史では、明治二年(一八八九)に北石垣村・南石垣村・南立石村・東山村が合併し石垣村が誕生、村役場は南石垣にあった。この時の大字は、速見郡石垣村大字北石垣である。

その後、昭和一〇年(一九三五)九月四日に別府市・亀川町・朝日村・石垣村が合併し、現在の別府市が誕生した。

(3) 北石垣の呼び方は、「きたいしかき」と「きたいしがき」の二様があり、現在は「きたいしがき」の読み方が

「きたいしかき」より多く呼ばれている感じがする。豊後國区書村町一覽（明治八年三月時点の速見郡一九区内の一四区）では、往昔の唱え方として「きたいしがき」と記述がある。

明治一八年（一八八五）六月に編集された豊後國速見郡村誌（二の二）（人数・牛馬・舟車・人力車等計数の調査時点・明治九年（一八七六）一月、川・道路・堤防等の調査・明治一二年（一八七九）頃）によれば、亀川（かめかわ）村・北石垣（きたいしかき）村・南石垣（みなみいしかき）村・中石垣（なかいしかき）村・鶴見北中（つるみきたちゅう）村・流川（ななかかわ）・永石（ながいし）川等の記述がある。

(4) 住所表示方法について郵便物や書類等をみると、地名大宇北石垣〇〇番地や小宇の〇〇をつけたり、中宇の中須賀〇〇組を使用したり地名の表示方法は、多様化していると思われる。なお、日常会話で字名を使うことがあり、現在も時々話題に上がり明治初期の字図が重宝されている。

(5) 中須賀は大字北石垣に属しており、地名は、大字と小字の中間・中宇にあたる呼び方である。

① 中須賀の呼び方は、「なかすか」が適切と判断される。

「地名は、地形から来るものである」ことを基本的に考察し、別府大学・別府図書館・大分図書館にある辞典・辞書・全国の地図・文献及びインターネット検索等に於いて研究した結果は、「なかすか」が適切な呼び方だと判断された。中須賀・なかすかの語源及び地名の読み方の根拠資料を掲載する。

① 須賀（すか）は、川水や海水等で運ばれた砂が積もって小高くなった所・砂丘・砂地

② 須賀（すか）は、川辺や海辺に多く、川や海の洲を須賀（砂地）とも呼ぶ。中の洲を中須賀、南の洲を南須賀と言う地名がある。

③ 九州沿海図一一七九に中須賀（なかすか）村の記述がある。

④ 別府市誌の六五頁に石垣原扇状地の解説文にスカ（須賀）の記述がある。

⑤ 宮の井戸記念碑の解説文に中須賀（なかすか）の記述がある。七四・七六頁に南須賀（みなみすか）の記述がある。

⑥ 日本分県地図地方総覧一九九四人文社）・南須賀（みなみすか）・中須賀（なかすか）元町・本町・東町の記載がある。

⑦ インターネットで郵便番号一覽表の中須賀元町検索・読み方は、なかすか元町・八幡石垣神社の住所検索・読み方は、なかすか本町とある。

⑧ 亀の井バスの春木バス停は昭和三六年地図で春木須賀とある。

② 北須賀・中須賀・南須賀の地名の使用は、いつ頃だろうか

北須賀の地名を証拠づける文字は、大石の傍の石碑（縦文字）「加藤新平翁頌徳之碑」下の横文字「北須賀組」の表示があり、大正六年（一九一七）三月に北石垣村北須賀の住人が建立している。次の史跡も同年代であるが、中須賀公民館の南側にある石碑は、旧公民館の北側、その前は消防詰所と火の見櫓の間にあった。公民館の新築により現在地に移動した。この石碑は、「溝口翁功德碑」横側に発起人石垣村北須賀、裏側に賛同者 村長帆足蔵太 収入役鶴田定一の名前がある。大正三年（一九一四）九月に石垣村北須賀の住人が建立している。

また、中須賀児童公園入り口前の三叉路に、大正二二年（一九二三）三月溝口まつ「参詣道」の石碑がある。「溝口まつ」は、溝口翁の妻である。溝口翁とは、溝口榮三郎氏（元治元年（一八六四）一二月生、村会議員）のことである。

次に中須賀と南須賀の地名を記す文献は、「郷土戦史の研究」昭和二年（一九二七）一月一日帝國在郷軍人大分支部発行の「石垣原の戦闘」の石垣原戦闘前二於ケル両軍ノ配置要図に中須賀・南須賀の地名がある。更

に古くは、宝永五年（一七〇八）三月三日吉富伊右エ門経筒を北石垣中須賀諏訪本に埋め経塚とする。（経筒銘文）の記述があり、中須賀の地名はこの年以前から使われていたものと判断される。

なお、三つの須賀の地名は、三つの石垣地区名に関連して使われていたものと考えられる。

③ 北石垣・中須賀・亀川線の道路は、なぜ旧国道と言われるのか。

「別府の古い道歴史散歩」（別府史談会）には、歴史的生い立ちと現状について詳しく記載されている。また、別府市誌にも記載があり、総合して旧国道の謂われが判る。

昔の人は、今の国道一〇号線が開設される前、小倉から豊前を通り別府を経て府内（大分）に至る道路のことを豊前道（小倉街道）と呼んでいた。豊岡の頭成（覚正寺）—小浦—小坂—古市—亀川—北石垣—中石垣—南石垣—別府—浜脇—赤松—銭瓶峠—高崎—府内へ続く。なお、別府を南北に貫く豊前道を往還と呼んでおり、海岸線とほぼ平行になっていた。豊前道は明治一九年（一八八六）に国道三五号線となり、大正九年（一九二〇）四月一日

に国道三号線となった。この間に別府の海岸線工事が進み境川まで昭和一〇年（一九三五）代に完了した。昭和一四年（一九三九）一月七日から中山香間の工事が始まり、昭和二七年（一九五二）二月に完成し、国道一〇号線と称され経済流通の道路となった。

所謂、石垣線の浜脇―南町―中町―本町―北町―行合町―野口町―別府中央部―石垣―亀川（御越）間の道路の呼び方（国道三五号―国道三号）は、明治一九年（一八八六）から昭和二七年（一九五二）二月までであり、この年から国道三五号―国道三号は消滅し、新たな呼び方をしないため、旧国道と呼んだり、石垣線と呼んだりしている。

④ 第一の鳥居の位置は、八幡石垣神社の裏側の方向にある。中須賀元町三組立川博氏宅、三宅寿三男氏宅の隣に設置されており、現在は金網で囲われ通れなくなっている。手洗石の場所が東側になっていて西側が昔の位置で、参道の入口で手を洗い、鳥居を通り常本から諏訪本の参道に向け進み、つき当たりの第二の鳥居（第一の鳥居と向かい合わせに建っていた）を通り左に折れ東の鳥居を通るのが道順であった。

ここで、豊前道（小倉街道）を細分化すると、現在の亀川中央の道―四の湯前―観音寺前の平田川を渡る―平田天満宮裏道―国指定史跡鬼の岩窟古墳の裏道―別府大学体育館前の「わくど石」―大石の三叉路（南鉄輪、平田、北石垣の村界の目印）に通じ、登り道をまっすぐ進めば九州横断道路へ、右に曲がり橋を渡れば湯の川・鉄輪方向へ通じる。問題の豊前道は、この大石付近から左手に折れ、昔は山林だった中須賀児童公園北側の石碑「溝口まつ（参詣道）」を通り、参詣道から第一の鳥居の間が不明であるが、右側に折れ、現在の実相寺に通じる鉄橋手前を左に折れ、荒金保男氏豊後西國第四八番札所跡地前から現エト―シン工場内（昔山林）を通り第一の鳥居に至ると考えられる。その考察は、①豊前道は、春木川を渡渉し対岸の中石垣村へ渡る、実相寺遺跡の次郎・太郎古墳の裏道に通じる。との史実から、春木川の渡口を考察すると、向の原から古寺、現在の緑の鉄橋付近と推察される。

今は護岸工事のため大きく掘り下げられているが、昔は岩石や砂の堆積で堤防は両岸の台地まであり春木まであったとの記載がある。さて、鳥居の向きを考慮する

と、荒屋敷から山林を抜け鳥居に向けた道があったと考えられる。②立川和央氏宅西側の地藏尊に明和五年四月(一七六八)の観音様が安置されており、荒金保男氏豊後西國第四八番札所跡地の石垣があること③向の原地蔵尊前の道は、供養塔に刻まれた年号に文政三年

(一八二〇)、文政一〇年(一八二七)の石碑がある。従って、春木川寄りの豊前道は水害の被害を受け通行に支障が生じるため、現在の道路(向の原地蔵尊前の道―第一の鳥居前の道)を寛政二年(一七九〇)前後に造られたものと考察する。この頃から荒屋敷側の道を経て第一の鳥居を通る人が少なくなり現在(昔は周りが暗く、二人横隊がやつとであった)の道が本流となったものと考えるのが自然であり、各街道から豊前道へ通じ八幡石垣神社の参拝が容易にできる様になった。

また、中須賀交差点の南北道路もこの頃から使われ始めたと考察される。

(参考) 豊前道は、天正一八年(一五九〇)安土桃山時代の絵図(別府市美術館所蔵)には、一本のみの記載がある。元禄七年(一六九四)貝原益軒の地図にも一本しかない。上人小学校付近から現在の春木橋、南石垣への道路と

別府から亀川方向の南から北に通じる道路は、享和三年(一八〇三)田能村竹田・伊藤鏡河『豊後國志』及び文化七年(一八一〇)伊能忠敬『測量日記』に二本の道路の記載がある。これは、豊前道路から経済活動と生活に有利な里道が拡大されたと考えられる。

なお、現在の様に南北間がほぼ一直線道路になったのは、明治以降の道路整備工事によるものと考えられる。

(6) 中須賀地区は人口の増加に伴い、昭和三八年四月一日に桜ヶ丘町が分町し、昭和五〇年四月一日に中須賀から中須賀元町・中須賀本町・中須賀東町として発足した。

町名の選考経過を八組一の小野三武氏(分町前は中須賀自治会総務部長であり分町後は中須賀元町自治会の会計を務めた)によると「町名を旧国道から上を北町、旧国道から下を中町、国道一〇号線までを東町にする意見があった。東町名は異論なく、二町について、歴史と将来的発展性並びに希望を内包している町名を考え、元町・本町・東町に意見集約された」と分町当時の思い出を語って頂いた。  
元町・元とは、物事の起こり、始まり、以前等を意味する言葉である。元町は小倉(豊前)街道が通っており、円

通寺遺跡や寺院に関する地名、石塔等仏教に寄り添い心豊かな生活を営む人々の願いを込められた地区名と伺える。

本町・・本とは、物事の根本であり、太い木の根を意味する言葉である。本町は、旧国道を境に八幡石垣神社を中心とした地域であり、神社を住人の守り神として敬い、安全に生活を送れるよう人々の願いを込められた地区名と伺える。

東町・・東とは、別府湾に昇る真つ赤な太陽を指しており、東町は、八幡石垣神社の塩水採取の「祠（お旅所）」が現在の国道一〇号線深町附近にあった。この地から扇山を見上げ末広がりの住宅建築が盛んな地域となっている。宅地開発が進み、昭和世代と平成世代の人々が平和な生活を送れる願いを込められた地区名と伺える。

昭和五〇年の分町前の組割りは、現元町地区は七組から一一の四組までであった。元町発足後は、一組一から九組二までとなっている。なお、旧六組と五組が元町八組一と八組二、桜ヶ丘地区三組と五組に分かれ現在も複雑となっている。隣は桜ヶ丘、その隣は元町と新居住者に地区の選択権を任せた行政指導の問題個所である。恐らく別府市内にも同様な事例があるものと推測される。

(7) 中須賀児童公園は、共有林（向の原一、四一一番地の約〇・二五ha）を市に寄付し、昭和四一年四月完成した。現在倉庫が二棟有る。これは、公園完成後に自治会が一棟設置、青木正則氏が昭和六三年四月一日寄贈した。その後、平成二三年に二棟の補修を行なった。なお、公園下の倉庫は、ゴミ置場として平成一四年一二月に設置され、平成二六年六月に資材倉庫として改修した。

ところで、公園内に三個の御影石があるのを知っている人が少ない。これは、春木川に掛けられていた石橋の一部である。七組荒金保男氏と八組二芝澄夫氏によると子供の頃、春木橋は丸太を掛けた木の橋（明治一九年（一八八六）建設長一八間、巾三間であり、それまでは橋がなく川を渡渉していた）だった。木製の橋は、水害時に流されるので、強固な橋の建設となり、岡山産の御影石で石橋（明治三七年（一九〇四）橋長二二間、巾三間半）を設置した。その石橋も昭和三四年（一九五九）九月二六日の伊勢湾台風で決壊したため、現在の鉄筋コンクリート製の橋がかけられた。その遺物の石とのことである。

(8) 中須賀元町・本町合同慰霊祭は、毎年八月一四日に中須

賀公民館で開催されている。昭和四一年から平成八年まで中須賀児童公園で実施していた。祭壇用の機材が老朽化して遺影・位牌が置かれなくなったこと、雨の日に開催できないこと、一四日に供養踊りを行い二四日の薬師・地藏尊供養音頭大会もあること等を総合的に検討の結果、平成九年から現在の中須賀公民館で開催することとなった。

(9) 毎年開催の薬師・地藏尊供養音頭大会は、地藏尊の縁日が八月二四日に当たるためこの日を選んだものと考えられる。荒金保男氏宅五輪の塔、立川和央氏宅西側の地藏尊、左山富夫氏宅裏五輪塔・塔婆、向の原地蔵尊付近には江戸時代の巡礼僧達の供養塔（常陸・肥前・豊後・杵築等）や文政三年（一八二〇）の杵築仲山仲蔵の塔、當載脩參道禪者日本廻国明北村山群雲祥院第子等があり墓地も多い。また、豊前道が大石から次郎太郎古墳を通り実相寺山の先に目齒頭地蔵に至る間に弘法大師坐像や地藏尊があり、この目齒頭地蔵（石版六地藏・石仏二体安置）も毎年二四日に地蔵盆と地蔵講が開催されていたという。このことから当地区も二四日に決めたのは自然の流れと考えられる。

なお、昔は音頭大会当日に在住者が多く、大勢の加勢が

可能であった。しかし、近年は土日以外の日に二四日が当たると仕事の関係から参加者が少なくなっている。このため日程をずらし土日に行く地区が増えており考えさせられる。会場は、現在児童公園であるが、それまでは、公民館の広場で開催していた。

(10) 中須賀元町七組荒金保男氏宅裏山に「ホルトノキの木」が二本ある。大人の両手巻にして三人分の太さであり別府市指定保護樹である。

更に樹木としては、「星こがの木」が一本（太さは大人の両手巻分）あり床柱や大黒柱として珍しい木だそうである。また、昔は黒松が三〇本程あり洪水予防の役割をしていたが、松くい虫により枯れたとのことである。また、鶴見山が噴火した時の一疊岩や大きな岩が三〇個程度あり、その中には、「さざれ石」に似た石もあり原生林として大変貴重な場所である。さらに、自宅裏には、昔春木川の氾濫により流された無銘の五輪の塔三層の塚等六体を安置している。

なお、現在は、石塚となつているが豊後西国札所四八番の祠があったといわれている。（注）ホルトノキとは、ポルトガルの木という意味で本来はオリブの木のことであ



るが、誤ってこの木の名前になってしまった。(平賀源内の時代)

(一八三六) 三月大乘妙典一千人供養塔願主大宮司伊藤源蔵と生目八幡宮の石祠がある。

(11) 中須賀元町七組立川和央氏宅西側には、祠があり、明和

(14) 中須賀元町六組伊藤憲一氏宅前には、北石垣村願主大宮

五年(一七六八)四月に奉納された観音像には、南無大師

司伊藤米蔵文化一〇年(一八一三)の石碑がある。

遍照金剛の刻印がある。中央に弘法大師座像、その横に修行僧が彫ったとされる不動明王像、その隣に石塔が安置されてお

(15) 中須賀元町一組曹源寺に、境内にキリシタン塔(三基)

れており、四三番札所とも言われている。荒屋敷は、川が

が安置されている。

浅く大雨の時は大水害を被っており村が何度も流されてい

た。災害除けの願掛けのため村民が設置した。なお、昭和

(16) 別府文化史年鑑及び洪水田畑損地見廻り願方日記(北石

の時代に立川シズ子、美夫、一氏が発起人となり現在地に

垣村庄屋吉富潤之丞)には、嘉永五年(一八五二)八月

祭られた。

二二日大型台風が襲来、豊後北東部甚大な被害、杵築藩で

(12) 中須賀元町六組左山富夫氏宅裏には、五輪塔や五輪塔婆

は二万人が飢餓人となる。別府では、この大雨により春木

等二五基が纏められて安置され、堂の中には三地蔵尊等が

川が氾濫、堤防が決壊、平坦地及び家屋が浸水した。倒壊

祭られている。荒屋敷には、水難事故に遭遇した人々を祭

家屋三〇軒、大松百本が折れたとある。その記録の中に大

る五輪塔や宝塔が多い、これは水害で流れ着いた塔等を集

宮司伊藤弥四郎と黒川吉富吾藤治の家が流されたと庄屋吉

め祭ったと言ひ伝えられている。

富潤之丞の記録がある。また、「別府の古い道歴史散歩」

には、曹源寺の本門・地藏堂・閻魔堂・大師堂・物置部屋・湯殿・門前大松三本が流失したとの記載がある。

(13) 中須賀元町六組左山辰子さん宅前には、天保七年

(17) 春木川・春木橋地域のことは、豊後國速見郡村誌(二の

二)に明治初期の状況が記載されている。その記載内容は、上流は祓川と呼び、下流は黒川の里俗として春木川、橋は祓橋・黒川橋とあるが地元の人々は春木橋と称している。

堤防は、字古寺から字春木の間、長さ八町六間(約八八二メートル)築かれている。馬が通る三尺(約九〇センチ)の小堤で境は堅くない、周辺に樹木・竹林もない。この川は祓・黒の字で表現されるように、荒れる・暴れる川の如く堤防は強固でない為いつも氾濫した。修繕費は三分が官、七分が民と負担させられ、氾濫の度に大きな苦勞をさせられた。

当地の地味(地質)は、赤色で砂地、質は悪く稲梁(いね・あわ)に適せず、水利は便である。早に苦しむのは稀であるが、悪水「汚水」のため灌漑に良くない。とあり昔から水問題は大きな課題であったことが判る。

祓川(春木川)の水位は、深い所が一丈(約一〇尺・三メートル)、浅い所で三尺(約九〇センチ)、川の広さ三〇間(約五四メートル)、上流の狭い所で二間(約三・六メートル)、流れは、急であり、水清く、味は淡く、舟筏は通せない、堤防はあるが、砂礫を積み上げた程度だった。

近世の黒川橋(春木橋)は、春木川の下流字寺ノ前の下手(黒川と春木の境界付近)にあり、橋が架かっている所の川の水深は三尺(約九〇センチ)川の広さ一八間(約三三・四メートル)、橋の長さ一間三尺(約二・七メートル)幅一間(約一・八メートル)の土橋であったと記述にある。なお、春木橋も豊前道(小倉街道)に属し、享和三年(一八〇三)豊後國志によれば、春木橋の上流に道路が描かれている。これが昔の豊前道であり、位置を考察すれば向の原から対岸の古寺に渡渉しており次郎・太郎塚へ向かう。ただし、橋が架かっていたかは、不明である。

さて、春木川の川中(原)は砂礫多く、水流は正中(中央)のみであり、川の広さと橋の長さの不具合がある。所謂、広い川に春木橋が中央に架けられ、水量が増えれば渡れなかった事を記述している。おそらく、広い河原を中程まで歩き橋を通るか、水位の浅い所を渡渉していたと考えられる。

なお、当時の北石垣村は、戸数一九〇戸(農業者一八七戸、漁業者三戸)男四一三人、女四〇四人計八一七人)牛一七三頭、馬一五頭、漁船七艘、人力車一五輛であり、物産は、米、麦、大豆、七鳥筵ししう、生姜である。

## 2 中須賀元町の誕生（中須賀分町）から今日

明治二四年（一八九一）の石垣村の人口は、六三二戸  
二、九六一人であり、大正九年（一九二〇）は七六四戸  
三、七四〇人から昭和五年（一九三〇）は九一七戸四、六八〇  
人と増加した。当時は大字北石垣と大字南石垣の二行政区で  
あり、中須賀は、この石垣村の大字北石垣の一部であった。

昭和一〇年（一九三五）頃中須賀地域の世帯数を参考資  
料「昭和一〇年絵図・立川博士保管絵図立川寒兵衛氏作」に  
よると約七九戸（旧国道の上方に三九戸、旧国道の下方に  
二九戸、春木に一一戸）の名前が記されている。近代化へ向  
けて石垣地区にも、海岸線に国道の新設や電車の運行、バス  
等の交通の整備・石垣地区の開発事業の促進・九州横断道路  
の開設等により経済活動が活発となった。その波及効果とし  
て、中須賀の人口推移を見ると、昭和三三年一九一戸八四六  
人・昭和三五年二九八戸一、二六九人・昭和四〇年四一二戸  
一、四七九人と急速な人口増加へと転じた。

そこで、中須賀地区の人口増加に伴い、将来的発展のため  
分町への方向性が議論された。

その結果、昭和五〇年四月一日に中須賀は分町し中須賀  
元町（なかすかもとまち）として発足した。昭和五〇年

（一九七五）当時の地区別実態は、元町三七九戸一、一二四  
人・本町三八六戸一、一四二人・東町四六五戸一、三九二人で  
ある。春木三六九戸一、一八二人・桜ヶ丘五二九戸一、三〇一  
人・上人南四〇〇戸一、一一二人であった。自治校区は、石  
垣校区から分割し春木川小学校の新設に合わせ春木川校区と  
なった。

なお、桜ヶ丘は、昭和三八年四月一日に中須賀から分離し  
ている。

各町の人口動態調査の平成二六年実態を見ると、元町  
三一一戸六三九人と人口は半減している。本町四二二戸  
八一七人・東町九〇七戸一、七〇一人・春木三二二戸六五八人・  
桜ヶ丘五八四戸九二九人・上人南三八五戸七八三人であり東  
町・上人南を除き他の五町は、人口が減少傾向にある。

分町前の中須賀自治会会長は、吉良文夫氏（現中須賀本町  
八組）であった。

中須賀元町となって初代自治会会長兼公民館館長は、立川勝  
人氏（七組）六期一一年間・二代目立川友寅氏（三組）七期  
一四年間・三代目立川文彦氏（七組）五期一〇年間・四代目  
鈴木三壽氏（二組）二期四年間・五代目小嶋智憲氏（四組）  
が就任している。